

写真紹介 - 19 「大学通りの彫像」 1964（昭和39）年



写真1 大学通りと彫像付きの街路灯：1964年 ファイルNo. 029_287_01¹

はじめに

国立市広報担当から当館に移管された写真資料からピックアップしてのご紹介。今回は、1964（昭和39）年に大学通りを収めた1枚を紹介します。

この写真が撮影された1964年の最大のトピックといえば、10月に開催されたオリンピック東京大会と言って良いでしょう。この年の10月8日には計23名から成る聖火リレー隊が、小雨のふりしき中、国立の街を駆け抜けています²。

写真1はまさにそのオリンピックが開催されている最中に撮影されたであろうものです。写真単体からは撮影時期を特定し得るだけの情報は抽出できなかったのですが、この写真と同じネガフィルムの数枚後の撮影分に、国立駅南口駅前広場の円形公園に建っていた「祝オリンピック東京大会」の広告塔を収めた写真があります（写真2）。この広告塔が10月以降に設置された可能性があることからすると、

写真1も10月頃の撮影なのかもしれません³。

写真1は大学通り東側の歩道を南側に向かって撮影したものです。撮影ポイントは、現在の東1丁目15番地の大学通り沿い、東一条通りよりも少し南側の歩道になります。ちょっと前のこの辺りをご存じの方であれば、「撞球場 ミドリ」（1995・平成7年12月閉店⁴）の前と言った方が撮影場所がよく分かるかもしれません。



写真2 オリンピック東京大会の塔が立つ国立駅南口
1964年 ファイルNo. 029_287_06

- 1 「ファイルNo.」とは、当館所蔵の写真資料に関して営利を目的としない利用に供するため、当館に保存されている電子データのファイル番号を表示したものです。
- 2 この聖火リレー隊については当館ホームページ「机上のメモから」で資料紹介しています。「くにたちを駆け抜けた聖火リレー隊」：<https://kuzaidan.or.jp/province/curator-info/19641008/>
- 3 前掲註2の資料紹介中、「4. 円形公園に設置された塔」で広告塔の設置時期を検討しています（12・13頁）。なお、最近確認した新聞記事（『朝日新聞』東京版・三多摩 1964年9月26日（土）14面）では、台風20号の接近による強風で、「国鉄八王子駅前と京王八王子駅前に立てられた二つのオリンピック歓迎塔が、強風のため倒れた」とし、この歓迎塔は9月20日に八王子市オリンピック事務局が立てたものと報じています。この記事からすると、国立駅前でも10月より前からオリンピックの広告塔が設置されていた可能性が考えられますが、実際の設置時期はまだ明らかではありません。
- 4 渡辺彰子『くにたち：商店街形成史 ー国立大学町を中心としてー』（株式会社サトウ、2000年）54頁「ピリヤード「ミドリ」」



写真1の部分
 左：歩道脇に積み上げられた鳥カゴ
 右：オウム？の入った鳥カゴ

ちょうど写真の中央辺り、現在は緑地帯となっていて、ところどころに鳥の入ったカゴが積み上げられています。よく見ると車道寄りにはオウムであろう鳥の入ったカゴも置いてあります。何故この場所にこんなにも鳥カゴが置かれていたのか、今から考えると不思議な光景ですが、当時この場所には鳥獣店がありました。そのお店で飼育していた鳥を店舗前の歩道脇に置いていた状況が写し撮られたようです。お母さんとその子ども達でしょうか、歩道の店側に立っている人が写されていますが、その場所にあったのが鳥獣店です。当時を知る国立生れ・国立育ちの当館の前館長は、この写真を見るなり、「〇〇さんのところの鳥獣店だよ、ここ！懐かしいなあ」と即座に教えてくれましたから、ご記憶にある市民の方は多いかもしれません。

さて、その鳥カゴの手前に写っている街路灯をご覧ください。街路灯自体はよくある笠の形で変哲のないもの（というと怒られるかもしれませんが）ですが、その台座部分が特徴的です。台座がかなり腰高になっていて上部が歩道側にせり出す



写真1の街路灯台座部分

ような形状をしています。そしてその上に人形のような、ロボットのような抽象的な何かしらの像が置かれています。さらにその上を見ると、像を照らすかのようなライトが街路灯とは別に取り付けられています。鳥カゴ手前の街路灯だけがこのようになっているのではなく、その奥（南側）にある街路灯も同様の形状の台座をしており、その上にはやはり何かしら像めいたものが置かれていそうです。この街路灯は一体どういったものだったのでしょうか？

この写真をはじめに見た時にまず目に留まったのがこの街路灯でした。以下この点を掘り下げていきます。

大学通りの彫像付き街路灯

この大学通りの街路灯については、当時の国立町報などの行政サイドの資料からは情報が得られませんでした。そこで藁をも掴む気持ちで新聞記事へと手を広げてみたところ、ありました！幾つかの新聞記事でこの街路灯とそこに設置された彫像のことを取り上げていました。

このような調べ物をする際、今年5月に50周年を迎えた国立市の中央図書館で資料化している『国立市関係新聞記事』は大変に重宝するシロモノです⁵。今回もそこに綴られた新聞記事を検索したところ、大学通りの彫像付き街路灯は、1959（昭和34）年に設置されたものであることが分かりました。また、各記事で街路灯設置や彫像の詳細を知らせています。これらを手がかりに街路灯設置の経緯等を追ってみます。なお引用する1959年の新聞記事は、別添資料として一覧にまとめていますのでご参照ください。

大学通りの彫像付き街路灯に関して最も早く報じたのは、1959年4月14日付の産経新聞でした（別添資料①）。この記事では「国立町大学通り商店街の日本でも初めてといわれる彫刻による街路灯計画」と紹介しています。

設置の経緯に関しては、「大学通りに街路灯設置運動が起きたのは三十二年秋のこと。大学通り商店街三十店が中心になって昨年末ようやく“文教地区国立のメインストリートにふさわしいもの、”ということで彫刻による街路灯設置案がまとまり、デザイン完成をまって近く着手することになった」とあ

5 『国立市新聞関係記事』は、くにたち図書館で国立にまつわる新聞記事をピックアップしてまとめ直し、それを日付順に綴っているものです。『国立市に関する新聞記事索引』を用いれば、各トピックから記事の検索もできます。また1986年以降の新聞各紙（日経新聞を除く）については、図書館ホームページの「新聞記事見出し検索」から記事の見出し等の検索が可能です。
 くにたち図書館「新聞記事見出し検索」：<https://www.library-kunitachi.jp/opw/LOC/LOCKUNOPWSRCHKIJI1.CSP?DB=LIB>

り、報道された時点で設置案は決定していたようですが、まだ着手には至っていないことが分かります。また、街路灯については「防犯の意味もかねて街路灯の設置がいそがれていた」とも述べています。

設置する街路灯は「ロータリーぎわから一橋大学まで四百五十枚の間に左右十二か所二十四個」が設けられ、その台座の上に彫刻が置かれる計画であったようです。

台座に据える彫刻に関しては、「画家伊藤接さん(四一)のあっせんで国立在住の今城国忠、中村博直、大国丈夫、岡〔関：引用者〕保寿、関敏、江口週など日展系新制作派などに属する彫刻家が制作に当ることになって」といると報じています。ここで彫刻制作の斡旋者として挙げられた「伊藤接さん」とは、国立駅南口の駅近くにある喫茶店「ロージナ茶房」(1954・昭和29年5月創業⁶)の創業者、伊藤接氏とみられます。同氏について「画家であり、旅行家であり、骨董などにも造詣が深かった接さんは、政治家や学者、芸術家との多彩な交流があった⁷」と紹介されていますが、大学通りの街路灯設置に際しても同氏が彫刻家との橋渡しの役割を担っていたであろうことが窺い知れます⁸。

記事では、1957(昭和32)年秋に大学通りへの街路灯設置運動が起ったと記しています。商店街への街路灯設置の動きについては、従来、富士見通りと旭通りへの設置がクローズアップされ、『国立市史』等にも記載がありますが⁹、大学通りへの設置に関しては詳らかではありませんでした。

富士見通りと旭通りへの街路灯設置は、1958(昭和33)年2月22日の国立商業協同組合の理事会で街路灯設置の提案がなされており、翌年度には支部毎に実行委員を選出して、計画・実施することが決定されています¹⁰。この提案より前の段階で、設置についての協議が各支部でなされていたことでしょう。そうすると1957年秋に起こったと報じられた大学通りの街路灯設置運動は、富士見通り・旭通りへの街路灯設置の動きとさして変わらない時期にな



写真3 新たな街路灯(ネオン灯)の設置された富士見通り
1961年
ファイルNo. 017_167_18



写真4 新たな街路灯(ネオン灯)取付工事中の旭通り
1959年
ファイルNo. 005_059_12



写真5 新たな街路灯(蛍光灯)の設置された旭通り坂下
1960年
ファイルNo. 009_091_12

されていた可能性が考えられます¹¹。

ちなみに、1947(昭和22)年に設置された木製の街路灯¹²から新たな街路灯への切り替えが完了したのは、富士見通りが1958年12月18日、旭通りが翌年7月20日のことでした¹³。

6 『国立市史』下巻(国立市、1990年)493頁

7 朝日新聞東京総局『中央線の詩』上(出窓社、2005年)122頁

8 今回の写真紹介に関する調査として行った保科隆治様(保科理容室代表)への聞き取り(2024年5月13日)でも、大学通りの彫像付き街路灯を設置するにあたって尽力されたおひとりとして、伊藤接氏の名前が挙がっています。

9 前掲註6の501頁～503頁に「商店街の街路灯建設問題」の記述があります。また、国立町商業協同組合が十周年記念誌として1966年に刊行した『十季誌』には、街路灯建設経緯の詳しい内容が記録されています。

10 前掲註9の『十季誌』44頁

11 前掲註9の『十季誌』所載の「国立商業協同組合街路灯建設経過報告(10.25)」において、大島金作理事長は、「街路灯建設の声は商工会当時から度々話題にのぼっていましたが、その機運に至らないで今日に至りました」(53頁)と述べており、商店街への街路灯建設は、商業協働組合設立の1956年より前の段階から話題になっていたようです。

12 前掲註6の497頁

13 前掲註9の『十季誌』56頁・62頁



写真6 街路灯建替え前の旭通り坂下 1958年
ファイルNo. 003_033_03 を加工

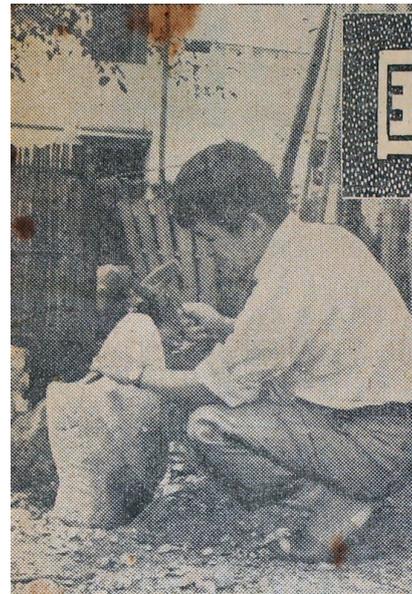
写真5に近いアングルで2年ほど前に撮影された1枚。まだ蛍光灯の街路灯への建替えはなされておらず、赤枠囲みの部分に木製の街路灯らしきものが確認できます。これと同種の街路灯とみられるものが、『国立大学町旭通りーくにたち旭通り商店街のあゆみー』（国立旭通り商店会、2003年）の巻頭写真で「昭和29年頃「東区商工会」時代の街路灯」として掲載されています。

先の産経新聞の報道（別添資料①）から約4か月後の8月28日、東京新聞が大学通りの彫像付き街路灯を取り上げています（別添資料②）。

この時期になると街路灯に設置される彫像の制作が実際に進められていたようで、「町内在住の新進彫刻家関保寿さん、敏さん兄弟と岡正敏さん、江口週さん」の4氏が彫像制作の協力者として挙がっています。その後の報道でも同じ4氏が制作者として紹介されていますので、街路灯に設置された彫像はこの4氏によって制作されたと考えられます¹⁴。

先の産経新聞（別添資料①）では、彫像の「材料は費用の点でセメントが使われるはず」としていましたが、実際にセメントが材料として利用されたようです¹⁵。聞き取り¹⁶でも、耐久性の低いセメントが彫像の材料にされたのは、街路灯設置の予算不足が原因との指摘があり、厳しい懐事情の中で特色ある街路灯の設置が目指されたようです。

東京新聞（別添資料②）では彫像の制作に関し、「自分たちの住む町を少しでも美しくし、また彫刻というものを実際に街頭に出して各層の人に見てもらうことは、展覧会に出品するより意義があると思い、仕事を買って出た」とし、「四氏が全面的に協力を申し出てくれた」ことが制作依頼につながったと報



「製作中の関敏さん」

『東京新聞』都下版 1959年8月28日（金）8面
「国立「大学通り」に新名所」（別添資料②）掲載写真
関敏氏アルバム貼付記事より

じています。この「全面的に協力」という表現には、予算的な制約の下での依頼というニュアンスが感じられます。別添資料⑤の読売新聞では、彫刻家有志の4氏が2ヶ月にわたって「奉仕的」に彫像を制作したと述べていますが、彫像付きの街路灯が大学通りに設置されるにあたって、制作者サイドの自主的な作品提供という側面があったと考えられます。

彫像が据えられる街路灯自体は8月下旬には完成していたようで、「すでに支柱二十四本はできており、彫刻の完成する九月中ごろ駅前から一橋大正門までが取り付けられる予定」とされています¹⁷。

街路灯の除幕式は9月27日に催されるとも報じられますが（別添資料③）、実際には10月5日に開催されています。翌6日の毎日新聞（別添資料④）と読売新聞（別添資料⑤）の2紙が除幕式開催を伝えています。

ここで注目されるのは、設置主体となった商店会に関する情報です。別添資料⑤では、彫像付き街路灯の設置について「去る七月国立町大学通り建設委員会（会長高田重氏）を設け」たとしています。

4月14日付の産経新聞（別添資料①）の記事では、前述のとおり、1958（昭和33）年末には彫像

14 別添資料③の読売新聞では「街路灯には同町在住の新進彫刻家関保寿さんら五人の作品が支柱につかわれる」と制作者を「五人」としていますが、別添資料④の毎日新聞で「関保寿、関敏、岡正敏、江口週氏の四人の彫刻家」、同⑤の読売新聞で「彫刻は同市に在住する関保寿さん（四〇）敏さん（二九）兄弟と岡正敏さん（四六）江口週さん（二七）の彫刻家有志四人」、同⑥の朝日新聞で「協力した彫刻家関保寿、関敏、江口週、岡正敏の四氏」と報じており、いずれも別添資料②の東京新聞と同じ4氏が彫像制作の協力者として挙げられています。

15 彫像の制作開始・完成後の報道で「セメント彫刻」（別添資料②）、「セメント像」（別添資料④）、「作品はセメントで人物、動物を抽象的に刻まれ」（別添資料⑤）と表現していることから、材料にはセメントが使用されていたようです。

16 前掲註8と同じく、2024年5月13日の保科隆治様（保科理容室代表）への聞き取り。

17 別添資料③に「街路灯二十四基を設置する工事が去る六月から行われていた」とあり、工事は6月から始められていたようです。



「完成した彫刻街路灯」

『読売新聞』三多摩読売 1959年10月6日(火)12面
「人物・動物つきの街路灯」(別添資料⑤)掲載写真
関敏氏アルバム貼付記事より

付き街路灯の設置案が決定していたことが分かりますが、この案は「大学通り商店街三十店が中心になって」まとめたとされています。8月28日付の東京新聞(別添資料②)になると、街路灯設置の主体が「大学通り建築委員会(高田登会長 会員四十五人)が生みの親」と紹介され、9月24日付の読売新聞(別添資料③)でも「同〔大学通り:引用者〕建設委員会(会長 高田登氏)」を計画の主体として述べています。

新聞各紙で委員会名(建設委員会/建築委員会)や会長名(高田重/高田登)等に相違はあるものの、街路灯設置工事が進められていた7月になると、高田氏を会長とした委員会が大学通りの商店会組織として成立していることが分かります。

大学通り沿いの商店は当初、通り西側の店舗は富士見通りの商店会に、東側の店舗は旭通りの商店会に加入していたようですが¹⁸、街路灯を設置した1959(昭和34)年頃には大学通りで「国立通り商工会」が設立されています¹⁹。街路灯設置に関する建設(建築)委員会が7月に組織されていた点を考え併せると、街路灯の設置と大学通りの商工会設立に何かしらの関係があったのかもしれませんが²⁰。なお、会長として名前の挙がっている高田氏は、洋



写真7 彫像付き街路灯設置前の大学通り 1959年頃
77ファイルNo. 005_050_20 を加工

国立町による第1期配水管布設工事を収めた1枚。この工事は1959年3月31日に完成しているため、それ以前に撮影されたもの。赤枠囲みの部分に写真6にある木製街路灯と同種の街路灯が確認できます。1959年まで旭通りにあった木製街路灯と同じタイプのもので、大学通り東側に設置されていた可能性が認められます。



写真8 彫像付き街路灯設置後の大学通り 1964年頃
77ファイルNo. 027_262_10

現在地で新築開店(1962年)した多摩信用金庫国立支店のビルから大学通りを撮影したとみられる1枚。大学通り東側(写真の通り向かい側)の歩道脇に等間隔で彫像付き街路灯が設置されているのが分かります。

書専門店「銀杏書房」²¹の店主で、先に紹介したロージナ茶房創業者の伊藤接氏と共に大学通りへの街路灯設置に尽力されたおひとりであったようです²²。

大学通りに設置された彫像付き街路灯の除幕式を報じた『毎日新聞』(別添資料④)では、「同〔国立:引用者〕大学通り建設委員会では一本、一本の街路灯の名称を町民から募っている」と述べており、彫像の名称募集が行われています。同じく除幕式を報

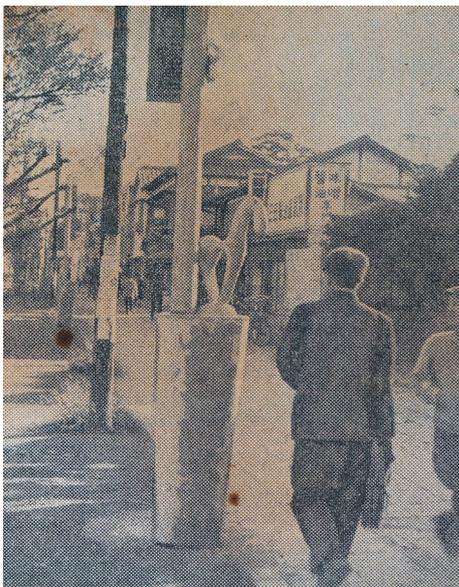
18 前掲註8と同じく、2024年5月13日の保科隆治様(保科理容室代表)への聞き取りでご教示いただきました。

19 前掲註6の497頁で「昭和三十四年頃には北区商工会、国立通り商工会がそれぞれ設立されている」としています。

20 前掲註6の497頁に「富士見通りや旭通りでは、昭和二十二年に木製の街路灯が設置されたが、その建設、維持、管理と建設業者や商・工業者の共同事業を推進するため、昭和二十五年に富士見通り商工振興会が結成され」とあります。街路灯設置が契機となって富士見通りの商工会が組織されており、大学通りでも同様のことが生じた可能性が考えられます。

21 前掲註4の『くにたち:商店街形成史 一国立大学町を中心として一』108頁で、増田書店を開業した増田秋賢氏は「今国立ではめずらしい洋書の専門店「銀杏書房」も、開業は昭和26年か27年頃です。その頃は私共のところとも仲間取引で、辞典類を分けていました。若かりし頃の今東光が2階に居候していました」と銀杏書房について語っています。

22 前掲註18と同じ。なお、別添資料⑤の『読売新聞』掲載の「完成した彫刻街路灯」と題された写真(この頁左上に掲載)で、左側に写る男性が高田会長で、右側の男性が保科民治氏(隆治様のお父様)の可能性があるとのご教示もいただきました。



「彫刻街路灯」

『朝日新聞』都下版 1959年10月16日(金)12面
「街灯柱の彫刻に名前」(別添資料⑥)掲載写真

関敏氏アルバム貼付記事より

じた『読売新聞』(別添資料⑤)では、「まだ名前は
ないので、八日までに一般町民の投票を求め、作者
のアイデアに最も近い愛称をつけることになっている
」とより具体的な情報が示されています。そして
10月16日付の『朝日新聞』(別添資料⑥)では、
名称募集の結果が報じられています。応募者が800
人を超えるという盛況振りで、「横たわる人」「も
だえ」「森の番人」といった名前が選出されたこと
を伝え、17日には「協力した彫刻家関保寿、関敏、
江口週、岡正敏の四氏と、当選者を招いて明るい町
づくりの懇談会を開く」としており、彫像の名称決
定に関してイベントが開催されたようです²³。

こうして1959(昭和34)年の秋、国立駅南口駅
前広場の先から一橋大学手前までの大学通り東西両
側に各12灯、計24灯の街路灯が商店会によって
設置されました。そしてその街路灯の各台座には、
国立町在住の作家4名が協力した24体の彫像が取
り付けられていました。新聞記事では、「けい光灯
の街路灯に様々な形の彫刻が組合せられたことはモ
ダンのなかにも落ちついたふんい気をかもし出し
て」(別添資料⑤)いと評されており、「大学通り
というアカデミックなふんい気に和して国立町の新
しい名物になろう」(別添資料④)と期待された街
路灯であったようです。

23 2024年5月13日の保科隆治様(保科理容室代表)への聞き取りでは、現在の多摩信用金庫国立支店の角で、街路灯に据えた彫像の名前募集をしていたことを記憶されているとの情報を得ています。

24 前掲註18と同じく、保科隆治様からのご指摘で気づいたところです。「緑地とは言えない土の固められた整備前の時期に、彫像を街路灯に据えたというのは、時代の先を読んでいた事業だった」と評価されていたのが印象に残りました。

25 『読売新聞』多摩都民版1977年10月3日(月)21面「泣いてます シンボル彫刻 国立市の大学通り 盗難や心ない看板 ビラ、ポスターもベタベタ」

写真1を改めてご覧いただくと分かりますが、当
時の大学通りの歩道脇はまだ「緑地」と呼べるよう
な状況にはなかったようです²⁴。現在でこそ桜や銀
杏の樹々を草花が彩る緑地ゾーンとなっています
が、街路灯設置当時は土が固められただけの味気な
い空間でした。その手前の歩道脇で人の目線の高さ
で点在していた彫像は、通りを歩く人々に文化的な
印象を与える装置となっていたことでしょう。

しかしながら、街路灯の設置から18年後の1977
(昭和52)年10月3日付の『読売新聞』で残念な
報道がなされることとなります。

「泣いてます シンボル彫刻 国立市の大学通り」
と題した記事²⁵では、「“芸術の街、国立市のシンボ
ル「大学通り」で、彫刻が“いたずら、に泣いてい
る”として、彫像が盗難やいたずらの被害にあって
いる状況を伝えています。「現在彫刻が残っている
街路灯は当初の二十四本のうち十九本」としており、
5体の彫像が既に失われていたようです。また、「彫
刻は残っていても、その下の台座にはキャバレーの
ホステス募集のビラやポスターがベタベタ張られ、
“美観、にはほど遠いのが現状。その中で悪質な
のは立て看板で、通行人から彫刻を見えなくしてい
る」と報じ、「立て看板によって半ば隠された街路灯の
彫刻」と題した写真を大きく掲載しています。

記事に拠ると、完成当時は珍しさから人目を惹い
た彫像も数年後には顧みられなくなり、いたずらや
ビラ等の貼付といった悪質な迷惑行為の被害に遭っ
ていたようです。商店会でもビラ等の除去にかなり
苦慮している点が報じられています。

彫像制作者のひとりであった関保寿氏の次のよう
なコメントが掲載されています。

「いたずらされるといい気持ちはしません。作っ
た当時は、街にも美術家の間にも、自由な発想
と熱気があったのですが…」

写真1は街路灯が設置されて5年後ぐらいに撮影
されていますが、彫像の台座にビラを剥がしたよう
な痕が確認できます。迷惑行為による被害は残念な
がら早い段階から生じていた可能性があります。

その後の彫像への迷惑行為がどのようであったの
か報じたものを確認できていませんが、1979(昭



写真集『わがまちくにたち』から 大学通りで

「市報くにたち」No. 350の1面記事(上)と掲載写真(下)和54)年の市報で街路灯に設置された彫像を収めた写真を掲載しています²⁶。これは国立市公民館の写真教室から誕生した「くにたちフォトサークル」を紹介した記事の中で、同サークルがまちを記録した写真をまとめ、1978(昭和53)年6月²⁷に出した手作りの写真集『わがまちくにたち』に収められた1枚を掲載したものです。

この写真に収められた彫像は、先の1977(昭和52)年の『読売新聞』で「立て看板によって半ば隠された街路灯の彫刻」と題されて大きく写真が掲載された彫像と同じものとみられます。新聞記事で

26 『市報くにたち』第350号(1979年4月5日)1面

27 前掲註26の市報では「昭和52年に手作りの写真集としてまとめられています」と紹介していますが、写真集には「1978.6月」の記載が確認されるため、こちらが写真集制作の年月と考えます。



写真9(上)・10(下) 大学通り東側歩道 1969年頃
 ファイルNo.(上) 049_496_13を加工
 (下) 049_496_14を加工

国立市広報撮影の写真では、大学通り東側歩道の東1丁目16番地の南寄り(一橋大学東キャンパス寄り)に市報掲載の彫像と類似のものを確認できます。この街路灯に設置されていた作品と推察されます。

は2枚の立て看板が立てかけられ、彫像の口から下が覆い隠された写真を掲載していました。市報掲載の写真は、夜間の撮影であるためビラの貼付状況などはよく分かりませんが、少なくとも立て看板の設置はなく、彫像がスポットを浴びているのが確認できます。新聞記事では、「ビラも看板も取っても取ってもまた張られるので、どうしようもない」という商店会のコメントが紹介されていますが、商店会などによる立て看板の除去といった対応策が継続的になされていたようです。

なお、同サークルが1983（昭和58）7月に発刊した写真集『わがまちくになち』第2集にも、同じ彫像とその前に佇む女性と一緒に収めた写真が掲載されています。自らの住むまちを写真で記録し続けていた同サークルのメンバーにとって、街路灯に設置されていた彫像は、撮影対象として意識されるまちの景色のひとつであったようです²⁸。

街路灯の彫像のその後

ところで、大学通り歩道脇の緑地帯にひっそりと置かれた4体の彫像があるのをご存じでしょうか？

以前から気になっていたのですが、彫像には説明板などは設置されておらず、その台座に何らの表示もされていません。この彫像が一体どういったもので、どうして大学通りの緑地帯へ設置されたのか、当初は全く手掛かりなしの状態でした。ひとまずは写真を撮影して記録をとることから調査をはじめました。

大学通りの街路灯に関する新聞記事を確認してからは、「もしかしたら」という漠然とした考えは抱いていましたが、確たるシッポをつかめずにいるうち、季節は移ろい年は過ぎ、調査の記憶も曖昧模糊となる始末…。

そんな折り、偶然出会ったのが「頑亭文庫」の前庭に設置されていた彫像でした。「頑亭文庫」は、関保寿（号：頑亭）氏のアトリエと庭を改装し、ギャラリー喫茶として2023（令和5）年6月にオープンしていますが、その前庭にひとつの彫像が置かれています²⁹。この彫像、どこかで見た覚えはあったのですが、頑亭文庫に保存されていた新聞記事を確認させてもらってやっと繋がりました。そうなのです！この彫像は、大学通りの街路灯に設置されていたものだったのです。当時、街路灯設置を報じた新聞記事の掲載写真にバッチリと収められている彫像なのです。

街路灯が切り替わった際に撤去された彫像を、制作者のひとりであった関保寿氏が保管されていたようで、それが時を経て頑亭文庫オープンに際し、前庭を彩る景色のひとつとして作庭時に据えられたのです。関保寿氏が保管されていた彫像であることから考えて、同氏が街路灯に設置するために制作した

大学通りの桜樹下に遺された彫像



大学通り東側：北



大学通り東側：南

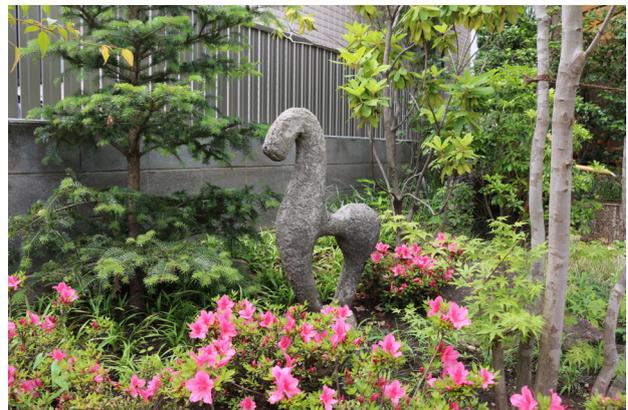


大学通り西側：北



大学通り西側：南

大学通り緑地帯の彫像4体：2017年6月調査資料より



頑亭文庫前庭の彫像：2023年6月撮影

28 今回の写真紹介にあたり、「くになちフォトサークル」の代表であった佐藤洋子様には、写真集掲載の彫像の所在位置等で調査にご協力をいただきました。不躰にも唐突に調査の勝手なお願いをしましたが、それにも拘わらず快くご協力いただきましたこと感謝申し上げます。

29 国立市観光オフィシャルサイト「くになち NAVI」に、「ギャラリー茶房 頑亭文庫」として紹介の掲載があります。
<https://kunimachi.jp/spot/%e3%82%ae%e3%83%a3%e3%83%a9%e3%83%aa%e3%83%bc%e8%8c%b6%e6%88%bf-%e9%a0%91%e4%ba%ad%e6%96%87%e5%ba%ab/>



出来上がった国立駅前の彫刻街
路燈

頭亭文庫前庭の彫像が収められた新聞記事掲載写真
『毎日新聞』都下毎日 1959年10月6日(火)12面
「国立駅前に新名物」(別添資料④)掲載写真
国立国会図書館所蔵
6頁に掲載した『朝日新聞』都下版 1959年10月16日(金)12面「街灯柱の彫刻に名前」(別添資料⑥)の掲載写真「彫刻街路灯」も、別アングルで同じ彫像を撮影しています。

作品とみて大過ないでしょう。

街路灯設置の彫像であることが確実な作品との出会いを経て、いよいよ大学通り緑地帯の4体の彫像が気になりました。全体的なボリューム感はいずれも似たような印象であることから、どの彫像も街路灯の台座に据えられていたとしてもおかしくないと考えられます。

こうなると彫像付き街路灯がいつ撤去されたのかがポイントとなるのですが、これを直接に伝える資料がなかなか見あたりません。ただ、現在、大学通りを灯す街路灯について、その設置を報じた記事にヒントが出てきます。

大学通りの駅前広場南側から一橋大学北側までの間に設置されている現在の街路灯は、1985(昭和60)年12月に設置されました。当時話題となった街路灯で、市報や新聞で取り上げられています。市報³⁰では、「昨年(1985年:引用者)12月に地元の大学通り商店会(吉野利春会長)が、老朽化した街路灯の建てかえを契機に、「国立にふさわしい、しゃれた街路灯を」ということで、パリシャンゼリゼと同じもの24基を直輸入し、大学通り(国立駅前～一橋大学北側)に設置したものです」と新たな街路灯の点灯式の写真を掲載して説明しています。この新たな街路灯が設置された大学通りの範囲は、彫像付き街路灯が設置されていたものと同じであり、設置台数も24基と同数です。「老朽化した街路灯」とは、1959(昭和34)年10月



「市報くにたち」No.444掲載の記事(上)と掲載写真(下):
写真11 1985年12月2日 国立市広報撮影)

に設置されていた彫像付き街路灯である可能性が高いと考えられます。

この点は新聞報道でさらに踏み込んだ記述が確認できます。『東京新聞』で「国立・大学通りにシャンゼリゼの街路灯」と題された記事³¹では、「現在、同商店街〔大学通り商店街:引用者〕には二十数年前に設置された二十四基の街路灯があるが、一部が腐食するなど老朽化がひどく、建て替えが迫っていた」と報じています。この記述からすれば、「老朽化がひどく」になっていた街路灯は、26年前に設置されていた彫像付き街路灯と言えるでしょう。1985年に大学通り商店会がパリシャンゼリゼ通りと同じ街路灯を大学通りに設置したのは、彫像付き街路灯の建替えとしてであったようです。

この点を補強すべく写真資料を調査してみたところ…、ありました！1985年10月24日に国立市広報が放置自転車を撮影した中に、街路灯の台座に据えられた彫像が収められた写真を確認できました。撮影日から考えて、やはり彫像付き街路灯を建替えて、現在の街路灯が設置されたとみられます。

街路灯建替えに際して、彫像がどうなったのかを伝える資料は、管見の限りにおいては皆無です。前記のとおり、関保寿氏の手元には彫像が保管されていましたので、建替えと同時に全ての彫像が失われ

30 『市報くにたち』第444号(1986年2月5日)7面「カメラかついで」新名所誕生 大学通りにパリの街路灯が」
31 『東京新聞』多摩版 1985年11月16日(土)13面「国立・大学通りにシャンゼリゼの街路灯 10年越しに実現 来月2日、待望の点灯式」。街路灯建替えに関する新聞記事は、前掲註5の『国立市新聞関係記事』にまとめられています。



写真 12 1985 年 10 月 24 日 国立市広報撮影

大学通りの放置自転車を撮影した内の 1 枚。紀ノ国屋国立店前辺りの状況を収めた写真ですが、歩道脇に街路灯の台座に据えられた彫像があります。この時点で彫像付き街路灯はまだ存在していたことを確認できます。この彫像は写真 13 にあるものと同じで、現存作品のひとつ。

たということではなさそうです。現在、大学通りの緑地帯にある 4 体の彫像も、この建替えの際に台座から外されて保存されたものである可能性が十分に考えられます。しかし、そこを繋げるだけの「裏どり」に手こずっていました。そんな中、最近になって当館の安齋主任学芸員から貴重な情報が寄せられました。

同学芸員は、本年度（2024 年度）の秋季企画展「石を彫る くにたちの彫刻家 関敏の仕事」を担当しています。展示に関する調査において関敏氏のアルバムを確認していた安齋主任から提示された写真には、大学通り緑地帯に設置されている彫像の内の 2 体を、街路灯設置時に撮影したものがありませんでした。更に、関敏氏がそのうちの 1 体を制作している様子を収めた写真（写真 15）も確認することができました。

現在、大学通り緑地帯に設置されている 4 体の彫像の台座は、いずれもタテ 300 mm × ヨコ 300 mm の同サイズで、同じような仕様によるコンクリート製



関敏氏アルバム中の写真（左）と大学通り緑地帯設置の彫像（右：通り東側北設置 高さ 615 mm）



写真 13 1976 年頃 国立市広報撮影

ファイル No. 103_179_16

紀ノ国屋国立店前辺りを緑地帯側から収めた 1 枚。歩道脇の街路灯の台座上に彫像が確認できます。この彫像は、上の関敏氏アルバム中の写真に収められている作品で、現存する彫像と同じものとみられます。

のもので、台座が共通していることからみて、関敏氏のアルバムでは確認できない 2 体の彫像も含めて、街路灯の建替え時に外され、4 体が同時期に台座を仕立てて設置・保存されたのであろうと考えられます。

アルバムの写真に収められている彫像と、現在の緑地帯に遺されている彫像を比較すると、写真でみる寸法の方が長いことがわかります。街路灯設置当時よりも、現在は寸法が短くなっているようです。街路灯の台座から彫像を撤去する際や、現在設置されている台座に新たに据えた際に作品の下端に影響があったのかもしれませんが。先に紹介した頑亭文庫前庭に設置されている作品は、街路灯設置当時の新聞記事掲載写真と比較して高さに大きな変化はなさそうですから、現在の彫像が短寸となっているのは経年劣化などの影響による処置だったのかもしれませんが理由はよく分かっていません。

なお、関敏氏のアルバムには、街路灯設置彫像を収めた写真が、紹介した 2 作品（10・11 頁の上に



関敏氏アルバム中の写真
(左)と大学通り緑地帯の
彫像(右:通り西側北設
置 高さ 665 mm)



写真 14 1976年11月21日 国立市広報撮影
7ファイルNo. 107_264_11

市内7か所で行われた清掃の内、大学通り西側歩道の清掃の様子を収めた1枚。歩道脇の街路灯には、台座上に彫像が設置されているのが確認できます。この彫像は写真15で関敏氏が制作中の現存作品と同じものとみられます。

掲載)以外にも5点確認されています(12頁に掲載)。これらの写真に収められた彫像は、関敏氏の手になる作品であった可能性が高いと考えられます。

現在、大学通りの緑地帯に設置されている4体の彫像は、大学通りの街路灯に設置されていたものが、1985(昭和60)年の街路灯建替えに際して取り外され、新たな台座を設えて緑地帯に遺されたもの^{しつら}と言えるだけの証拠がようやく揃ってきました。年代も分かってきましたし、ここまでくれば国立市に何かしらの情報や資料があるだろうと楽観視して市に問い合わせしてみました。ところが、市にはこの彫像設置に関する資料はおろか、情報すら皆無の状況であることが分かりました。

確かに、1985年の街路灯の建替えは「国立駅前大学通り商店会」によるもので、国立市が直接設置したものではありません。市に資料がないのも当然と言えば当然なのかもしれません。ただ、点灯式には当時の谷清国立市長が出席し、写真11の「街路



写真 15 街路灯に設置する彫像を制作中の関敏氏

1959年 関敏氏アルバムより
現在の国立せきやビル辺りにて、街路灯設置の彫像を制作中の関敏氏。この彫像は街路灯撤去後も保存され、大学通り西側の緑地帯に遺されています。後ろで制作の様子を見守っているのは敏氏の父、関喜太郎氏。同氏は「関屋」の創業者として知られています。

燈完成 点燈式会場」とある横断幕に「国立市産業課」が後援として確認できますので、市には何かしらの手がかりがあると勝手に考えていたのです。

こうなると、頼みの綱は商店会に資料が残されているかどうかですが、知人の商店主の方に伺ったところでは、そのような過去の資料を商店会で保存している可能性は低いだろうとのことでした。最後の詰めで想定外の足踏みをしていたところ、大学通りの商店会で古い話をご存じなのはこの方とご紹介いただいたのが、国立駅南口駅前の保科理容室代表の保科隆治様でした。いつもの厚顔無恥にして不躰もお構いなしのアプローチで、資料と問合せ内容を入れた封筒を持参して、勝手ながらお店にお邪魔しました。突然の訪問で保科様はご不在でしたが、訪問理由を伝えたお店の方が早々に取り計ってくださったようで、その日の内に直接連絡を頂戴し、後日お話を伺う機会を得ました。

保科様からは大学通りの街路灯について、彫像付きのものから、建替え後の現在のものに至るまで、商店会の動向等も含めてさまざまなお話を伺うことができました。それに拠ると、やはり現在ある街路灯への建替えに際して、従前の街路灯に設置されていた彫像を外したそうです。ただ、この建替え時には劣化が進んでしまっていた彫像が数多くあったよ



関敏氏アルバム中に確認された大学通り街路灯設置彫像（5点）の写真



左：前掲の『東京新聞』掲載写真「製作中の関敏さん」
 新聞掲載の写真であるため鮮明ではありませんが、この写真で関敏氏が制作している作品は、アルバムの写真に収められている彫像の可能性あります。なお、国立市広報撮影の写真（写真16・17、上の彫像部分の拡大は写真17）では、大学通り東側歩道の一橋大学東キャンパス手前（東5線手前）に類似した彫像が写し撮られていることから、この位置の街路灯に設置されていた作品であったと推察されます。

写真16（上）・17（下） 大学通り東側歩道 1969年頃
 ファイルNo.（上）049_496_13を加工
 （下）049_496_15を加工
 ※写真16は写真9と同じ



写真 18 1986年11月16日 国立市広報撮影分を加工

市内一斉清掃の様子を収めた1枚。現在、大学通り東側の北に設置されている彫像が、この時点で据えられているのが確認できません（赤枠囲みの部分）。遅くとも1985年の街路灯建替えの翌年には緑地帯に彫像が設置されていたことが分かります。

うです。先に紹介した1977（昭和52）年の読売新聞の記事で5体の彫像が既に失われている点を報じていましたが、1985年の街路灯建替え時には彫像がなくなって、台座だけが残っていたものが幾つもあったとのことでした。街路灯建替えに際し、設置されていた彫像の一部を補修して大学通りの緑地帯に飾ろうという商店会の案により、現在の4体が設置されることとなり、設置を国立市に認めてもらって、台座は市が製作したそうです。その台座を手掘りで緑地帯に設置している作業の様子をよく覚えているとお話でした。

やっと有力な証言を得ることができました。大学通りの緑地帯に設置されている彫像は、4体とも街路灯に設置されていたものが現在まで遺されていたのでした。大学通りでフト目に留まってから何年もの時が経過してしまいましたが、ひとまずその出自と経緯が明らかとなりました。

では、4体の彫像の制作者は誰なのでしょう？

街路灯への彫像設置を報じた1959（昭和34）年の新聞では、制作者として「町内在住の新進彫刻家 関保寿さん、敏さん兄弟と岡正敏さん、江口週さん」³²の4名を挙げていました。彫像が4体あることからすると、各氏の作品が1体ずつ遺された可能性も考えられますが、各彫像の制作者が誰なのか確定し得るだけの確実な資料はまだ揃っていません。

写真15では現存する1体の彫像を関敏氏が制作していますから、この作品は同氏の作品と言えるで



大学通り緑地帯の彫像 2024年4月撮影

左：通り西側・南設置 高さ540mm

右：通り東側・南設置 高さ670mm

しょう。また、もう1体についても同氏のアルバムに街路灯設置当時の彫像を収めた写真が確認できるため、この作品も関敏氏の作品である可能性が高いといえます。

残る2体については、現段階では制作者を推定する資料が十分にありません。ただ、通り西側の南に設置されている赤味がかかった裸体の彫像については、関保寿氏のご子息である関純様が、小さい時にこの作品のモデルになったとご記憶されており³³、関保寿氏の作品である可能性が指摘できます。また、保科様のお話では、この彫像は作品が朽ちているのを惜しんだ、作家自らが彫像を作り直し、街路灯の台座に設置し直したものであるとのことでした。そのために現存する作品の中でも状態が一番良く、材質の感じが他の3体と異なっているのもそのためであるとご教示いただきました。

大学通り東側の南に設置されている彫像については、作者につながる情報が全く入手できていません。当時の制作者4名のいずれかの作品であろうと考えますが、いずれの作家も誠に残念ながら既に物故されています。私がグズグズと怠慢な調査をしていたところにコロナ禍が重なり、作家の方々から直接お話を伺う機会を失ってしまいました。痛恨の極みです。どなたか何かしらの情報がありましたら当館宛にお知らせいただくと大変助かります。何卒よろしくお願い致します。

32 『東京新聞』都下版1959年8月28日（金）8面「国立「大学通り」に新名所 生れる「彫刻街灯」、街の芸術家が協力して」（別添資料②）

33 当館安齋主任学芸員が関純様から聞き取りした内容に拠ります。



写真 19 1976年12月1日 国立市広報撮影
ファイルNo. 108_285_18 を加工



写真 20 1969年頃 国立市広報撮影
ファイルNo. 059_588_05 を加工



写真 21 1970年頃 国立市広報撮影
ファイルNo. 061_615_12 を加工



広報移管写真中で、大学通り緑地帯に現存する彫像の街路灯設置時が確認できる写真。写真19では彫像正面から、写真20では背後から、当時の広報としては珍しくカラーで撮影した写真21では南側から駅前広場方向に向けて撮影されています。これらの写真からみて、駅前広場南側の多摩信用金庫国立支店の位置にあった街路灯に設置されていた彫像のようです。先に紹介した関敏氏アルバム中の写真にある現存作品と同じく、この彫像も元来より下端が短くなった状態で遺されていることが分かります。



写真 22 1966年頃 国立町広報撮影
ファイルNo. 039_400_09 を加工



写真22の広報移管写真に写された街路灯設置の彫像と、大学通り東側緑地帯の南に現存している彫像側面（2024年4月撮影）との比較。写真22にある彫像は、広報移管写真中に他のアングルで撮影されたものを確認できていません。そのため現存作品と同じものと確定するまでには至りませんが、側面の比較では類似しています。現存するこの彫像は、大学通り西側の駅前広場近くの街路灯に設置されていた可能性がありそうです。

フランス製街路灯の設置

1959（昭和34）年に設置された大学通りの彫像付きの街路灯は、その老朽化への対応として1985（昭和60）年に国立駅前大学通り商店会によって新たな街路灯に建替えられました。この時新たに設置された24基の街路灯が、現在、大学通りを照らす街路灯に繋がるものです。

1959年の彫像付き街路灯の設置は新聞各紙で取り上げられていましたが、1985年の新たな街路灯の設置も当時の話題となっています。

「国立にふさわしい、しゃれた街路灯を」³⁴ということで国立駅前大学通り商店会が計画した新たな街路灯は、パリのシャンゼリゼ通りと同じくフランスのレント社製で、国内で初めて輸入・設置されるものとして報じられました³⁵。12月2日午後4時から始まった点灯式では、「谷清同市長（当時の国立市長：引用者）や仏大使館の公使代理パトリック・ドゥ・カズノブ商務官らがスイッチを押」³⁶し、大学通りの東西に設置された24基の街路灯が一斉に点灯しました。

この1985年末の新たな街路灯設置がひとつの契機となって翌1986（昭和61）年に新たな動きが大学通りに生じます。それが大学通りにあった電柱の撤去（電線・電話線の地中化）でした。

電柱や電線への干渉を避けるため、桜や銀杏といった街路樹の枝を毎年払わなければならないという不具合もあり、電線等の地中化は以前から国立市が東京電力へ要請していたようです。それに加えて、商店会が設置したフランス製のしゃれた街路灯が、電柱の陰に隠れて美観が台無しになっているとの声もあがり、いよいよ電柱撤去の要望が強まっていくこととなります。そして1986年5月、国立市の要請に応え、東京電力が円高差益の還元のひとつとして電線の地中化工事に着手、NTTも電話線の埋設工事に踏切ります。こうして「国立駅南口から桐朋学園前まで約920mの区間で56本の電柱が撤去さ



左：写真 23 点灯式会場 1985年12月2日 国立市広報撮影
右：写真 23 に写るものと同位置の街路灯の現在 2024年5月撮影



写真 24 点灯式 1985年12月2日 国立市広報撮影

パリ、シャンゼリゼの灯が点る。
国立駅前大学通りにフランス生まれの街路灯

はるばるフランスから運ばれてきたファンタジックな街路灯が国立駅前大学通りにお目見得しました。パリではいまシャンゼリゼ通り、オペラ通り、モンマルトルの丘に同じ型の街路灯がロマンの灯を夜空に輝かせています。燈具は王冠をデザインした格調高い作品です。なんと、国立駅前大学通りに美しく咲く芸術の灯をお楽しみください。

国立駅前街路灯“点灯式”
日時 12月2日(月) PM.4:00
会場 紀ノ国屋国立店店特設会場
主催 国立駅前大学通り商店会 共催 フランス大使館経済商務部

国立駅前大学通り商店会
街路灯点灯記念セール
12月1日(日)～8日(日)
国立駅前大学通り商店会では、街路灯の点灯を記念して各店においてお買得品を豊富にご用意してお待ち申し上げております。
東京の newName になりました…国立駅前大学通り。

国立駅前大学通り商店会協賛店	スタヂオ木本	曙橋洋装店
ESYA KUNITACHI	白十字	山岸
植田母子産子教室	藤原商店	吉原屋小泉文具店
エス・エス・ワン シモムラ	ファッションハウス / ビジョン	藤倉エ門
カナメ靴店	プリウススポーツ	リビンハウスあさひま
紀ノ国屋	ホームズ・アートホーム	ル・ワン・ドゥ・ブーレ
松文堂	ファミリーファッション マロメ	ワイルド
服のナカガワ		

街路灯点灯式の商店会によるチラシ 保科隆治様ご提供

34 前掲註30と同じ。

35 『読売新聞』多摩読売 1985年11月15日（金）18面「パリ直輸入の街路灯 国立」では「フランスから日本への街路灯輸出は初めて」と、『東京新聞』多摩版 1985年11月16日（土）13面「国立・大学通りにシャンゼリゼの街路灯 10年越しに実現 来月2日、待望の点灯式」では「この街路灯が日本で設置されるのは初めて」「レント社製の街路灯が日本に輸入されたことはなかった」と報じています。

36 『毎日新聞』多摩 1985年12月3日（火）19面「パリの灯、明々と国立駅前大学通り」。点灯式については、同日付の『東京新聞』や『サンケイ新聞』でも取り上げています。いずれも前掲註5で紹介した『国立市新聞関係記事』にまとめられています。

れ」³⁷ ることになりました。

こうなると電柱に蛍光灯を設置していた従来の街路灯は、電柱と一緒に無くなってしまいます。そこで国立市は大学通りにふさわしい街路灯の設置を検討します。「大学通りの個性美を配慮したデザイン灯を検討し」³⁸ た市が選定した街路灯のデザインはどうなったのでしょうか？ 国立市民の方であればご存じでしょう。そうです、1985（昭和60）年に国立駅前大学通り商店会が設置したものと同じ型のフランス製街路灯を設置することにしました。市による街路灯設置を報じた市報（第458号：右に掲載）で「既に商店会が設置して好評を得ている街路灯」と述べていますので、商店会の設置した街路灯は大学通りにマッチするものとして認知されていたことが窺えます。通りに同じ型の街路灯が整然と並ぶことになったのは、大学通りの景観の面からみても適切な選択がなされたといえるのではないのでしょうか。

こうして市制施行20周年となった1987（昭和62）年の3月、一橋大学から学園通り（桐朋学園東交差点）までの大学通りに、国立市が47基のフランス製街路灯を設置し、21日に点灯しました³⁹。

さらに1988（昭和63）年になると、市は同型のフランス製街路灯をさくら通りまで延長することを計画します⁴⁰。このさくら通りまでの街路灯延長工事は、昭和から平成へと改元した1989（平成元）年の2月に開始され⁴¹、大学通りの東西に30基が追加して設置されました⁴²。なお、現在、学園通りからさくら通りまでの間には、フランス製街路灯は東側14基、西側15基が確認できます。街路灯の間隔等からみて撤去されたと推測される場所はありませんが、1989年に設置された街路灯のうち、どこの街路灯がいつ撤去されたのか詳細はまだ分かっていません⁴³。



「市報くにたち」No. 458の1面記事

国立市による大学通りへの街路灯設置を報じた市報。電柱撤去の経緯等についても触れています。



写真25 大学通りの電柱撤去

1987年4月23日 国立市広報撮影

余談ですが、1987（昭和62）年に設置された47基（同数が現存）の街路灯と、1989（平成元）年

37 『市報くにたち』第458号（1987年2月5日）1面「フランス製の街路灯47基を大学通りに設置」。大学通りの電柱撤去については、市報の記述のほか、前掲註5で紹介の『国立市新聞関係記事』にまとめられている、1986年4月6日付・同5月26日付『東京新聞』、同5月22日付『朝日新聞』、同10月17日付『サンケイ新聞』の記事を参照しています。

38 前掲註37の市報と同じ。

39 『市報くにたち』第460号（1987年4月5日）7面「明るくなった大学通り」。なお、同市報第470号（1988年1月5日）8面の「1987年の主なできごと」では、設置日を3月20日として表記しています。

40 『市報くにたち』第474号（1988年4月5日）4・5面「昭和63年度の主な事業」では、「既設の大学通りデザイン灯を、さくら通り交差点まで40基延長設置」するための予算額1,341万円（1万円未満切捨て）が示されています。

41 『市報くにたち』第497号（1990年1月5日）3面「昭和64・平成元年をふりかえって」に、「2月 パリの街路灯、さくら通りまで延長開始」とあります。

42 『昭和63年度 事務報告書』（国立市総務部総務課、1989年）302頁で、各種交通安全施設の執行状況等に、大学通りへのデザイン灯30基設置を事業費1,160万円として記載しています。

43 『市報くにたち』第755号（2001年9月20日）4面「大学通りのデザイン灯が美しくなりました」では、「桐朋学園より南側の30基が8月に塗り替えられ、美しくお目見えしました」と報じています。さくら通りまでとは記されていないため確実ではあ



写真 26 1987年に設置された大学通りの街路灯
1987年3月18日 国立市広報撮影

市報第460号（1987年4月5日）7面でフランス製街路灯47基の設置を報じた記事に掲載された写真。

に追加設置された30基（現存は29基）では、ちょっとした違いがあるのが現地調査で分かりました。はじめに国立市が設置した47基は、一橋大学より北側に商店会が設置したものと同じく、歩道脇の緑地帯にその支柱が設置されています。これに対して、追加設置された街路灯の支柱は緑地側の歩道に設置されています。お分かりいただけますでしょうか？ 後から設置された街路灯は、歩道に“はみ出して、支柱が立っているのです（さくら通り近くのものとは車道側植込み内に設置）。恥ずかしながら、実際に調査してみるまで気にも止めていませんでしたが、こんなところに設置時期の違いがあるようです。

さて、大学通りのフランス製街路灯は、国立市によってさくら通りまで連続して設置されたことを述べました。管見の限りですが、この後の市報ではフランス製街路灯の増設を報じたものは確認できません。では、国立駅南口駅前広場の南から設置されている大学通りのフランス製街路灯が連続してあるのは、さくら通りとの交差点までなのでしょうか？ さくら通りを過ぎ、その先を南に進めばJR東日本南武線の谷保駅北口に至ります。さくら通りより先の街路灯はどうなっているのでしょうか？ 国立にお住まいの方はご存じでしょうか？

実はさくら通りとの交差点より先も、谷保駅北口の駅前ロータリー際まで、同タイプの街路灯が連続して設置されています。通りの東西にそれぞれ13



左：1987年設置の街路灯（西017号）2024年5月撮影
右：1989年設置の街路灯（西027号）2024年7月撮影



南武線 谷保駅北口ロータリー際の街路灯（富・62898）
2024年5月撮影

基、計26基が確認できます。市報の情報に頼っていた私は、同じタイプの街路灯が連続しているのは、さくら通りまでだと勝手に思い込んでいました。今回の現地調査でその先にも連続していることを知った時は、驚きと同時にいかに普段の自分が物事を観察できていないかを思い知りました。「観察し記憶することだよワトスン君」、これでは大好きなシャーロック・ホームズには到底及ぶべくもありません。

さくら通りから谷保駅北口ロータリー際まで設置されている街路灯はいつ設置されたのでしょうか？ 街路灯には各灯に「管理 国立市役所」と記された銘板が付けられていますので、設置者は国立市であると考えられます。しかしながら、前記のとおり、市報にはその設置を報じた記事は見当たりません。何かしらの手がかりを求めて国立市の『事務報告書』を探ってみました。さくら通り・北大通り・学園

りませんが、この時点までは1989年設置の30基がそのままの数で残されていた可能性があります。

通りなどの「デザイン灯」に関する記述はあるものの、大学通りのそれを明確に記したのを見当たりません。1994（平成6）年度の各種交通安全施設整備工事の執行状況等には、「デザイン灯」26基の設置に関し事業費1,442万円とありますが⁴⁴、どういう訳かこの通りのデザイン灯なのか明記していません。ただ、数が一致するため、さくら通りから谷保駅北口ロータリー際までの街路灯である可能性はありそうです。1994年度中に何かしらのヒントが他にないかと、当館の国立市広報移管写真や新聞記事を漁ってみました。手がかりなしで確定できませんでした。すると、問い合わせしていた国立市の担当課から連絡があり、台帳との照合により1994年度設置の街路灯であるとの情報を得ました。設置した国立市の回答ですから間違いのないでしょう。さくら通りより南にある街路灯の設置は、1994年度中になされたもののようです。

大学通りを灯すフランス製街路灯は、まず国立駅南口駅前広場南から一橋大学手前までの24基が、国立駅前大学通り商店会によって1985（昭和60）年に設置されました。その後、一橋大学から学園通りまでの間に、商店会設置と同タイプの街路灯47基を、国立市が1987（昭和62）年に設置します。それを南へと延伸して、1989（平成元）年には学園通りからさくら通りまでの間に30基、1994年度中にはさくら通りから谷保駅北口ロータリー際までの間に24基を、いずれも国立市が設置します。概ね10年の時間をかけて、国立駅南口から谷保駅北口までを繋ぐ大通りに、同じタイプの街路灯が連続する現在の景観が形成されたこととなります。

おわりに

大学通りの緑地帯に佇む彫像に目が留まってからのくらいの年月が過ぎたことでしょうか…。偶然の出会いや様々な情報の提供を受け、彫像たちの出自や今の場所へ設置された経緯を少しは解き明かしました。現存する彫像が誰の作品なのか、今後更なる調査を要する宿題もありますが、いつもスッキリしない気分で眺めていた緑地帯の彫像たちに、遅ればせながら調査の進展を報告できそうです。

今回の写真紹介では、大変多くの方にご協力をい



全国公募 第1回野外彫刻展
大賞 | 重くて、脆くて、とても厄介なもの / 中島真理子氏
2024年5月撮影

ただきました。国立市の各担当課には、マニアックに過ぎる細かな情報の問合せに対応してもらいました。各担当者の丹念な調査とご協力にお礼申し上げます。また、関敏氏の貴重なアルバム写真等の掲載をご了承いただきました関堅様、写真集掲載写真の調査にお骨折りいただきました「くにたちフォトサークル」代表であった佐藤洋子様にも感謝申し上げます。なお、この度の紹介では、保科隆治様からお聞かせいただいた情報が重要な鍵となりました。大学通りの街路灯をはじめ様々な情報をご提供頂き、誠にありがとうございました。重ねてお礼申し上げます。

現在、大学通りにある彫刻というと、「くにたちアートビエンナーレ2015」のメイン事業であった「全国公募第1回野外彫刻展」で、2015（平成27）年3月に設置された6点の作品を思い起す市民の方が多いかもかもしれません⁴⁵。「くにたちアートビエンナーレ」は、「いつも歩く道で出会うアートがいちばん身近な風景となる」「芸術の散歩道」を創り出す芸術祭であると紹介されています⁴⁶。それを遡ること半世紀以上前の1959（昭和34）年、大学通りの街路灯には、まちに住まう作家達の作品が据えられました。「芸術の散歩道」は既にここで始まっていたとは言えないでしょうか。大学通り緑地帯に遺された彫像は経年による劣化が目立っています。これらの作品にも改めて人々の意識が注がれることを切に願います。

(2024.08.06 中村記)

44 『平成6年度 事務報告書』（国立市総務部総務課、1995年）236頁

45 「くにたちアートビエンナーレ2015」については、『国立新書第4号 小さな創造 芸小ホールと市民が育む文化芸術』（国立市役所政策経営部、2024年）の「第2部 まちなかでの文化芸術」を参照しました。

46 前掲註45の75頁